

## ■■ おとら狐 I ■■ == => おとら狐の話

おとら狐は三河国南設楽郡長篠村を中心として、同郡東郷村と鳳来寺村との一部、および八名郡舟着村にわたって、一般に呼んでいる一つの狐の名である。その名の由来はあるだろうが、私は知らぬ。他の地方では、長篠のおとら狐、または長篠の御城の狐とも言っている。



おとら狐は長篠合戦のおり、櫓に登って戦を見物しておって、流れ弾にあたって左の眼を傷つけ、それから片目になったと言う。その戦というのは、天正元年の戦か、または同三年であったか不明であるが、甲州方敗軍のことおよび馬場山県戦術を云々するというから、すなわち天正三年の時のことであろう。

その後おとら狐はまた信州犀川の岸で昼寝をしておって、狩人に対岸から狙撃せられて左の足を傷つけ、そのために跛になったという。それ故におとらに取り憑かれたものは、左の目からたえず目やにを出し、また左の脚の痛むのを通例としている。

おとらが犀川の岸で撃たれたのは、いつのことか確かでない。一説にはおとらはそのとき犀川で殺されたとも言う。しかして今日人に取り憑くのは、おとら狐の娘であるとも言う。

おとら狐の前生に関する物語は、ただこれだけである。これはおとら自身が、取り憑いた病人の口を藉りての身の上話だそうである。またおとらに一定の住所のあることは聞かぬのである。

明治の初め頃、長篠村字長篠金山かなやまに、あるいはおとらを祀ると言い伝えた祠があった。それは以前にあつて潰れていたのを、その頃再興したものである。今日再び荒廃して、ただ壊れた祠が、叢の中に残ってるばかりであるが、再興の当時は非常な繁盛であつたという故老の話である。今から六、七年前にも、附近の老婆が、徴兵除けの御利益があると称して、祈祷をしていたところ、警察官がたちまち出張して祠を毀したと聞いた。おとらに取り憑かれたためにこの祠に参詣するというようなことは、まだ絶えて聞いたことがない。しかし人によっては、右の祠はおとら狐を封じて祭っているのだと言う。その類の祠は他にもこの附近にあるからそうかもしれぬ。



また、長篠城の本丸跡のやや北寄りに、八幡と稲荷を合祀した一つの石の祠がある。御神体もなく、年号も見当たらず、伝説によるとこれが昔の長篠城の鎮守の神であったということである。天正の戦以来、城は廃城となり、稲荷の御社も世話をする人が絶え、ついに附近の住民に憑くようになったと言う。おとら狐に憑かれたときは、油揚げや赤飯などをこの社へ捧げて祭るならわしがある。すなわちこれをおとら狐としているのである。また四、五年前から、旧暦の二月初午の日には、この近所のものが祭りを営むという話である。

おとら狐は浮浪人が村から村へ転じて行くように、甲の家から乙の病人へと、常に移って行くのである。そうして嫌われているのである。それ故に村のものが彼を呼ぶには、単に「おとら」もしくは「おとら狐」「おとらの野郎」などと言い、決して「稲荷様」「こんこん様」等の、里人が通例用いる尊称は用いないので、したがっておとら狐の取り憑いた病人は、たとえそれが親であろうと目上であろうと、いつでもいたって悪い待遇を受けるのである。

おとらの取り憑くのは、多くの場合には病人であるが、時としては健康体の者に突然憑くこともある。一定せぬように思う。後の場合においては、最初から取り憑いた場所とか、その動機とかを口走るものが多い。動機というのは、本人が転んだから取り憑いたとか、または不景気で食物が十分でないためなどという類である。〔そのほか、甲の病人からあらかじめ、幾日頃にはそこの家へゆくなどと、予告してゆくことが多いとも言った。〕これに反して病人に憑いた時は、最初は通例ごく静かにしている。それがおいおい台所の食物がしきりに紛失したり、戸を締めてあつ

たはずの戸棚の中のものが見えなくなったりするので、家人が疑いを抱き始めるのである。また病人の食事の量が急に増して来たり、その嗜好が急に変わって来たりするので、見破られるのである。

私が幼少の頃に七十余で亡くなった村の某という老人などは、おとらに取り憑かれていて家のものももてあまし、村内の血気な者が、二、三人ずつ交代で監視していたものである。魚が食いたいと言うと、なま魚を皿に載せて出す。箸も何も添えないのである。すると病人が蒲団の中から首を出して、口をつけてかじるのである。七十幾つの歯もない老翁が魚の頭から骨まで何一つ剩さずに、ばりばりと音を出して、食べてしまったという話である。

一般に取り憑かれたものは瞳が失せるなどと言うくらいで、非常に物凄い相貌をしている上に、終始狐の素振りをするので、女や子供は怖れて傍へも行かぬのが常であるが、この老人などは特に甚だしかったそうである。監視のものも、夜分は黙って枕元に座っているが、昼間になると毎日毎日出て行け出て行けと繰り返すので、これに対しそれでは赤飯を炊いてくれるなら行くと言う。そこで言うとおりにすると、今度は油揚げの弁当をこしらえてくれと言う。次には車に乗せて村境まで送ってくれねばいやだと言い出す。ずいぶん残酷な話であるが、その病人を荷車に載せて村境まで送って往って、七十以上の老人を倒さにして振りはたいたなどという話もあった。それでもおとらは離れなかったという。

一般におとらに取り憑かれたものは死ぬようである。まれには離れたという話も聞くが、それは健康体のものが、突然取り憑かれた場合に限るかと思う。短いので二〇日、三〇日、長いのは二年も三年も憑いていたことを聞いている。

これは私が一四のとき、おとら狐に取り憑かれた婆さんの孫から、その日その日に深い興味を持って聞き取った話である。その婆さんの孫娘が、山へ薪を採りに往つての帰りに、途中で一休みして、ふたたび薪を負い、立上ろうとすると、今までと変わって非常に重くなり、足が前に運べぬほどであったのを、やっと我慢して還つて来ると、座敷に寝ている婆さんが、ただいまは御苦労様と言う。何のことかと聞いて見たら、婆さんにはすでにおとらが憑いていた。ちょうどその娘が通りかかったので、道で遊んでいたおとらは、それを幸いと薪の上に乗って来たのであった。

また村の某という男が、藪の中に作ってある山葵<sup>わさび</sup>を盗んだのを、この婆さんがすっぱ抜いて、大笑いしたこともあった。

どこの家でもおとら狐が憑けば、まず陰陽師や修験者を招いて祈祷をして貰うの

であるが、それで効のないときには、遠州秋葉山の奥の山住様というのを迎えて来る。ただ山住は里程も遠いことであるから、たいていならば修験者だけですますのである。山住様をお迎えして来ればかならず離れるという。しかし多くの場合にその病人はやはり死ぬようである。〔渋川の某女は、翌日から飯を炊いた。〕里人は狐が食物を獲んがために、命のとつくないものを、無理に生かしておく故に、離れるとすぐ死ぬのだと言うている。〔出沢村の鈴木戸作の祖母米が、久しく患っていて、ある夜息を引きとったので、近所の人を集めてそれぞれ親戚へ飛脚を出したと言ったが、約二時間を経てからふたたび息を吹き返したが、それから三日間生きていたと言う。そして俺は死んでまた生きて来たから幽霊だと言って座敷をふらふら歩いた様子が、白髪を振り乱して九尾の変化のようであったと言う。〕

山住様を迎えるには、お札で迎えて来るのと、お姿で迎えて来るのと二通りの方法がある。お迎えに行く時も帰ったときも、病人にはいっさい聞かせず、不意に表に立って、山住様のおいでになったことを、家のものに告げるのである。すると家のものは座敷の障子を開いて、さあこちらへお通り下さいと言い、すなわち座敷から、床間へずっと通して、すぐにお祭りする。床間には櫛を立て注連縄を張って、塩を三宝に載せて供えておく。お姿で迎えて来た場合には、この櫛の間を透かして、お犬様の姿が肉眼に見えるなどとも言う。

山住様は山の犬のことで、それ故にお犬様とも言うのである。山の犬が塩を好むとは、われわれの郷里で普通に言うことで、よく山の犬に送られたときは、お札は門口に塩を置くとも言う。この地方の民家では、山住様の姿を描いた札を魔除けとして門口に張っているのをしばしば見かける。山住の迎えに行くものは修験者ではなく、普通の男が行くことになっている。